

——ヤバイ……ヤバイ！ ヤバイ！

早朝、らみは目が覚めてしまった。強烈に胸騒ぎがして息苦しいほどだった。

——やばい！ テロスの奴らが追い掛けて来る！

彼女は昔から悪い予感がよく当たる。



「サッチー、起きろ。サッチー！」

らみは佐知恵の肩を揺さぶった。

「今すぐ着替えてみみなを連れて逃げろ！」

「どうしたの？」

佐知恵はたちまちちゃんとした表情になった。

「やばいんだ！ とにかく逃げろ！ やつらはわたしが引き付ける！」

「だめよ、そんなの！ 一緒に逃げましょう」

「つべこべ言うな！ 急いでこっからズラかれよ！」

らみはそのまま部屋を飛び出した。普通は『ヤバイ』と感じる方角から遠ざかろうとするものだが、今回だけはそちらへ向かって突き進んでいく。廊下から薄暗い階段のエリアに入ると、ますます胸騒ぎがひどくなって、もう吐きそうだった。

足音が昇って来る。らみは階段を駆け降りた。

「ラミビーナ！ 1号の方か」

鉢合わせになった敵はらみも面識のあるギタブラーという改造人間だった。

「どうしてここがわかった？」

らみは足が竦むのを堪えて問い質した。

「2号は俺のものだ。俺はいつだって彼女のことを見守っているのさ」

ギタブラーは病的な薄笑いを浮かべた。

「てめえ、このストーカー野郎！」

「お前たちの脱走はまだ誰も気付いてなかったから、俺は早速幹部に掛け合って追跡隊長に志願した。隊長と言っても他に隊員はいないがな。ラバーズ二人くらい俺一人で十分だからな」

らみやみみなのような、男の相手をする女性の改造人間は『ラバーズ・シリーズ』と呼ばれ、コードネームの頭には『ラミウザ』『ラディーテ』『ラミビーナ』のように必ず『ラ』が付けられる。

「てめえみてえな変態野郎にはぜってーみみは渡さねえぞ！」

「ほう。2号の本名はみみなというのか？ いかにも柔らかそうで彼女に相応しい名だ」

ギタブラーは舌なめずりしながらニヤニヤ笑った。
「邪魔者には死んでもらう！」
らみの胴体中央部に、ギタブラーの機械仕掛けの腕が突き刺さった。
「ぐほっ」
らみは血と油と、その他判別し難い液体を吐き散らした。



「う……腕が抜けねえな」

ギタブラーがもがいた。

「それにしても、お前らが自爆装置と毒素発生装置を取っ払っちゃったのはラッキーだったぜ。お前をここで始末した後で、俺はみみなを誰にも知られない場所に隠す。テロスには、予想外の抵抗に遭って、やむなく二人とも殺したとでも報告しておけばいいんだからな。そして、俺とみみなの二人だけで極楽みてえな時間を過ごすんだ。へへへ……堪んねえぜ」

腕を引き抜くのに梃子摺りながらも、ギタブラーはへらへらと喋り続けた。

「てめえはみみなの所へは行けねえよ」

らみの改造されたボディは、胴体部分に蒙った損傷の影響で動力系統が暴走し始めて、爆発寸前だった。

——達者でな、みみな。幸せに暮らせよ……。

目を閉じたらみの身体が凄まじい閃光を発した。

爆音はホテルから飛び出した佐知恵とみみなの耳にも届いた。二人が諫波探偵社に駆け込んだ後、佐知恵の同僚の滝口探偵がホテルへ赴き、事件のあらましを調べてきた。現場検証中の知り合いの警察官から聞き出した内容を総合すると、らみは追っ手諸共爆発して果てたものと思われる。みみなを逃がすために彼女は自らの命を犠牲にしたのだ。大切な人を失い、みみなのは悲嘆に暮れた。



身分証明書が出来上がり、みみなのはホテルからマンションへ移った。不要となってしまったらみの顔写真付き身分証明書も、みみなのは肌身から決して離そうとしなかった。そして、いつまでも泣き続けた。佐知恵はみみなのことが心配だったが、どうしても外せない仕事があって探偵事務所に戻らなくてはならなかった。用事を済ませるなり大急ぎでマンションへ駆けつけると案の定……。

「きゃあああつ、みみなちゃん！」

引き戸の上の小窓から吊るした紐を、首に括りつけたみみながだらんとぶら下がっていた。



「お帰り、サッチー……」

ぶらぶら揺れながらみみなのは擦れた声で囁いた。

「あの……降ろしてもらっていい……？」

佐知恵が倒れていた椅子をを起こしてみみなの立たせると、緩んだ紐をみみなのは自分で解いた。

「なんてことするのよ、ばっかっ！」

佐知恵は泣きながら叱りつけた。

「うええーん……！ 改造人間ってなんで死なないのよおー」

みみなも泣きじゃくった。

「首吊りも駄目、ガスも駄目……」

「ガス？」

佐知恵は悶絶して床に倒れ込んだ。

— どうりでさっきから臭いと……。

「きゃあっ、サッチー！ 死んじゃだめっ！」

みみながびっくりして飛び上がった。



「窓……開けて……窓……」

佐知恵はかろうじてそれだけ口にした。みみなのは窓を開け放った。

— 諫波衆じゃなかったら、わたし死んでたわ……。

げぼげぼ咳き込みながら、佐知恵は外の空気を必死で吸った。

「窓から飛び降りたら死ねるかな……？」

思い詰めた表情でみみなのはベランダから下を眺めている。
「だめっ！ 絶対にだめっ！」
ガスの元栓を締めていた佐知恵は全力疾走してみみなに飛びつき、しがみついて止めた。
「連れてってあげるから！ らみちゃんに会わせてあげるから！」
「えっ？ そんなことできるの？」
みみなのはくるりと振り向いた。
「なあんだ、もー、早く言ってよ、サッチーの意地悪ー」
佐知恵の両肩をぽんと叩いた。



「本当はこういうことあんまりしちゃいけないのよ」
佐知恵は浮かない表情で呟いた。
「サッチーって、魔法使いなの？」
手を繋いで歩きながら、みみなのは周囲に広がる不思議な光景をきょろきょろと見回した。

第一、第二の扉を抜けると、そこは豊穡な生命に満ち溢れた光の海だった。
「わー、きれい……」
みみなのは喚声を上げた。
「あっ、らみちゃん！」
らみの姿が浮かんで見えた。
「あっ、ばか、お前！ こっちに来ちまったのかよ？」
らみは罰の悪そうな顔をしてみみなのを見た。
「わああーん！ らみちゃんのばかばかばかあっ！」
みみなのは駆け寄って抱きついた。
「ずっと側にいてくれるって約束したじゃない！」
「わかったわかった！ もう二度とお前を独りぼっちにはしねえよ！」
らみも泣きながらみみなのを抱き締めた。
「わっ！ らみちゃん、乳房（ニューボー）が復活してるよっ！」
みみなのはらみの胸の膨らみを覗き込んだ。
「お前もだろ？」

「あはっ。うわあーい！」

みみなははしゃぎながら、たわわに揺れるその重みと感触を両手で確かめた。もはや二人の身体は改造ボディではなくなっていたのだ。

「じゃあ、わたし、らみちゃんと行くから……」

みみなは佐知恵を振り返った。

「いろいろごめんね、サッチー……」

らみとみみなは手を繋いで歩き出した。

「世話になったな、サッチー」

「じゃーにー」

二人の姿が光の中に吸い込まれるようにして消えた。手を振りながら見送る佐知恵の目にも涙が光っていた。





——これでよかったのだろうか……？
笑顔で別れはしたものの、佐知恵の胸中には切なさが残った。

(終)